

第7回ピースポート「旅と平和」エッセイ大賞 次点作

ついでついでついで／梁衛東さん

「じゃあ、行ってきます」と出かけようとした私。

「いつてらっしゃい」と私の手をしっかりと握りながら、言ってくれた祖母。私は今年の七月七日に日本に来た。その日はちょうど日本の七夕で、私にとっては家族と別れる日だった。しかし、私は悲しくなかった。祖母が「いつてらっしゃい」と言ってくれたからだ。

私の家は、毎年の春節、外国から祖母への年賀状や電話が必ずやって来る。電話に出たことがあったが、ある知らないおじいさんの声だった。普段祖母への電話はあまりないから、誰だと母に聞いたことがある。「それはあなたの大叔父だよ。今マレーシアに住んでいるのよ」と母は答えた。「へえ。うちは外国の親戚もいるんだ」とびびくりした。当時の私はまだ子供でただ驚いただけで、深く考えたこともなかった。その経緯は祖母自らに話しが及ぶことがなかったが、両親さえもあまり喋るうとはしなかったのだ。少し大きくなると、だんだんわかるようになってきた。祖母の小さな頃、曾祖母は幼い息子を連れて、マレーシアに行ったそうだし、なぜ祖母は一人中国に残ったのかと聞いたら、しつこいと言われて、大人達に叱られた。何度も祖母に聞きたかったけれど、「おばあさんに聞いてはダメ。おばあさんは悲しむよ」という母の話が頭に浮かび、我慢した。家では、このことはずっとタブーになっていた。

祖父母は七人の子供がいるが、息子は父一人しかいない。だから祖母は唯一の長男である私のことをかわいがってくれる。しかし、いつも味方をしてくれていた祖母は四年前、私が大学で日本語を専攻したことに強く反対した。なぜかと聞いたら、「日本人は皆悪者だ。彼らの言葉を勉強するなんて、私は絶対認めない」と答えた。固執した私は祖母とぶつかってから、大学に通い、祖母と会う時間がだんだん少なくなり、かつての笑い声も二人の間から消えていた。あの時、祖母はいったい何を怒っていたのだろうか。

三年生の時、自分の人生や将来のことをとても迷っていた時期があった。何をやりたいのか分からなかった。そして、2010年二月の冬休み、一人でアモイに旅をした。あの日のことは今でも目に浮かぶようだ。

友達とコロンヌ島をゆったりと歩いてきた。二月の朝の空気は、薄着の私にはさすがに寒く、寝ぼけ眼をしていた私をすっかり目覚めさせた。コロンヌ島はアモイにある美しい島であり、殖民地時代の名残を留める昔ながらの建物が多数残っている一方、華僑の故郷として、洋風建築が立ち並び、私は昔からずっと憧れていた。この前ネットで知り合った地元の友達が、その日わざわざ付き合ってくれて、それぞれの洋館の歴史も教えてくれた。

洋館はほとんどドアが閉まっっていて、人がいない様子だったが、ある古い別荘を通り過ぎた時、中から人の話し声を耳にした。ついチラッと見ると、「あつ」と声が出た。なんと私が泊まっているホテルのルームメイトのおじいさんだった。私の部屋はイギリス人のカッブルとこのフィリピンのおじいさんとの四人部屋だった。初めの日は少し話をし、おじいさんは華僑だが、小さいころから外国で育てられ、英語とみん南語しかできなかったそう。確か今日もコロンヌ島に行くと言ったようだった。おじいさんも私を見つめ、親切に呼んでから、ドアを開け、別荘に入れてくれた。

これまでずっと洋館の外観を見ていたが、中身を見るのは初めてだった。それは大きくて歴史のある別荘だった。私には名前がわからない植物がたくさん植えられていた。「これはおじいさんの家なの？それじゃ、何でホテルに泊まっているの」と考えたが、失礼だと思っただけで聞かなかった。緑の奥には墓が建てられていて、すぐ

に私の目を引いた。墓には私よりずっと高い墓碑が立っている。大きい石に生えているその薄い緑色の苔が墓の古さを伝えていた。私たちは墓の前で足を止めた。

「墓碑の裏側の銘を訳してくれないか」

とおじいさんは私たちに向かって突然言った。石の後ろに行ってみると、ある縦書きの銘が彫ってあった。それは短いけれど、文語体で書かれたもので、私たちにとって結構難しい文章だった。しかし、おじいさんの熱い目を見て、できないとはなかなか口に出せなかった。友達と顔を見合わせて、「よし、やってみよう」と二人で決心した。私たちは頭を絞り、文ごととゆっくりにおじいさんに説明した。その墓碑銘がおじいさんの祖先の物語を語っているらしい。中日戦争のせいで、多くの人々は家もなく、一家離散してしまった。あの時、おじいさんの家族もそのひとつだった。読みながら、私もまるで津波の中の小船にいるようにあの時代に戻った。いつの間にか、墓碑銘が読み終わった。三人とも黙っていた。おじいさんは悲しげに墓石に触れて、目を閉じた。在りし日の思い出にふけっているのだろう。朝の風が吹いて、木の葉がさらさらという音が耳の中で響いていた。それは戦争で亡くなった人々への鎮魂歌だろうか。おじいさんは年に一回両親のふるさとに戻り、墓参りをしている。あの墓は今おじいさんと中国との間の絆になる。中国には家族はもう一人もいないのだ。「若者であるあなたたちは平和をちゃんと守りなさい。大切にしなさい」と最後、おじいさんは言った。

おじさんと別れ、一人で浜へ行った。突然、私は祖母のことを思い出した。今やっと分かってきた。戦争で家族がばらばらになり、きつとあのフィリピンのおじさんと同じように辛かったのだらう。それで、日本のことを憎み、日本語を選んだ私を怒ったのだ。今までの私は少しも気づかなかった。

旅が終わり、家に戻ったら、早速祖母の家に行った。「お婆ちゃん、お婆ちゃん」と待ってられないほど急いで声をかけた。「どうしたの。今度の旅はどうだった」祖母はいつものように微笑みながら聞いた。いくら大人になっても、私は祖母の目にはまだまだ子供だった。「お婆ちゃんの少し成長した孫になったよ」と、今度の旅のことを言い始めた。あのフィリピンのおじさんのことを言った時、私は祖母の手を握り、「お婆ちゃん、ごめんね。これまでつらかったでしょう」と言っていた。もっと早く気づけばよかったのに。祖母は涙が出て、子供の頃夜寝る前に童話を聞かせてくれた母のように、ゆっくり昔のことを語った。あの時、祖母はまだ13歳ぐらいだった。戦争のため、曾祖母が幼い息子を連れてマレーシアに行った。曾祖父が病氣だったので、長女としての祖母はやむを得ず曾祖父の面倒を見るため中国の田舎に残った。あの時代はいつ死んでしまうかもしれないほど危なかった。間もなく、曾祖父が亡くなり、外国にいる曾祖母と連絡が取れないまま、親戚も一人もいなかった祖母は数年後、祖父と結婚し、後は七人の子供を育てた。そのうち、曾祖母と連絡できたが、すでに家庭を作っていたから、マレーシアに行けなくなっていた。祖母はアルバムを取り出し、ある古い写真を見せた。それは大叔父の写真だった。

た。既に白髪のお年寄りになっていた。「今私たちの体もだめだ。二度と会えないかな、弟と」と、祖母は寂しげにそう言った。その晩、祖母と夜遅くまで話をした。大学生になってからこのような話し合いは久しぶりだった。私は孫失格だ。

祖母は今でも日本のことを憎んでいる。あのフィリピンのおじさんも。私と関係ないと考えていた戦争は突然身近なものになった。これまでの私は、戦争と平和に対して真剣に考えたことがなかった。戦争がもう私達から遙か離れ、日常生活では戦争の跡形も消え去って、今は平和の時代に暮らしていると思う。戦争がないと、平和が得られると考えていた。しかし、そうだろうか。人々は今もその戦争の暗闇から離れられないのだ。アモイで出会ったおじさんの物語、そして祖母のことを聞いて、戦争が人々に来たした傷はまだ人々の心に残り、消えてないのだ。私は戦争に対する認識は歴史書に書いた物語しか知らなかった。「戦争は残酷だ」「平和が大切だ」など、常識としていつも伝えられているが、「人々はなぜ戦争を起すのか」「平和とは何か」自分に問えば何も答えられない。何も知らない自分が恥ずかしくてならなかった。今が平和ならば、なぜ人と人、国と国の間で今も見えない壁がたてられているのだらう。中国と日本は、地理的に近いながら、両国の人のこのころの中では遠い国でもある。

しかし、私が今まで出会った日本人は皆親切にしてくれ、小さい頃から教えられていた日本人のイメージと違ったのだ。人と人の交流は最も重要ではないだらう

か。実際に交流しないと、その国、その文化が理解しにくい。理解し合わないと誤解が生じ、さらに大きな紛争になり、最後に戦争が起る恐れがある。突然、おばあさんが憎んでいる日本に留学しようと思った。自分を通じて、せめて私の家族、友達さらに彼らの友達へと真の日本を伝えたい。

日本に来る前に、祖母の家に行った。最後に、祖母は私の留学に合意してくれた。来日してからももうすぐ四ヶ月になる。ここで出会った人、体験したこと、自分の考えたことも家族と友達と分かち合っている。一人の力が小さくても、皆の力を合わせれば、いつか中日は近くて遠い国から近くて近い国になれると信じている。これは平和の為の私のできることだと思っ。

アメイへの旅は私の初めての一人旅だが、私の一生を変える旅でもあった。あの日の出会いや思い出が私の一生の宝になった。旅をしたのはよかった。今の自分は新しい旅を続けている。これからもっと広い世界を旅したい。あの日平和の意義を考えさせ、平和の大切さを教えてくれたその名さえ知らぬフィリピンのおじいさんともう一度会いたい。「おじいさんの気持ち、これから私が伝えていく」と言いたいのだ。私はごく平凡な23歳の中国の若者だが、出来る限りのことをしたい。平和の為に。